

岡田喜秋

旅情  
百景

# 旅情百景



著者 岡田喜秋

一九九〇年七月二五日 初版発行  
一九九〇年八月四日 初版発行

発行者 清水勝

発行所 河出書房新社

〒100 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-13-11  
☎03-3404-1861 (編集)  
03-3404-1201 (営業)  
振替口座 (東京) 0110802

デザイン 粟津潔

印刷 暁印刷株式会社  
製本 加藤製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1990 Printed in Japan

ISBN4-309-47197-8



kawade bunko

江苏工业学院图书馆

藏书章  
旅情百景

岡田喜秋



*Kawade Bunko*

河出書房新社



## 目次

### ●北海道地方

- 1 猿払原野の遅い春 10  
2 国境の島・礼文島 14  
3 知床半島の歲月 18  
4 小樽の雪の夜 22  
5 江差の港にて 26  
6 然別湖の育てた人生観 31  
7 豪雪の胆振線 35  
8 函館の語られざる秘密 38

### ●東北地方

- 9 八甲田山に捧ぐ 44  
10 津軽の廃港にて 47

11 陸中・山田の黒船騒動 51

12 陸中海岸の桐の花 55

13 最上川・舟下りの春 59

14 磐司岩で想う伝説 63

15 蔵王の明暗 66

16 二本松城下の哀歓 69

17 地震国の美景・沼沢沼 72

18 芦ノ牧温泉の人生 76

19 吾妻山・紅葉の山腹 80

20 春遠い米坂線 83

21 奥会津の木賊と民具 86

22 甲子温泉の美談 89

### ●関東地方

23 袋田の自然と味覚 94

- 24 子持牧場の冷氣 97
- 25 牧水の旅情・湯ノ平 100
- 26 奥那須の湯治場 103
- 27 御宿の異国情緒 106
- 28 郷愁呼ぶ秩父の宿 110
- 29 南房総・布良の水平線 113
- 30 小笠原の汀にて 116
- ◎中部地方
- 31 南伊豆の遠国島 120
- 32 西伊豆・戸田の「魔除け」 124
- 33 SLで見る大井川峡谷 128
- 34 秋葉神社・今昔 131
- 35 姫街道と東名ハイウェイ 134
- 36 奇景・鬼岩 137
- 37 篠島の人情 141
- 38 踊り明かす郡上八幡の町 144
- 39 奥美濃・雪の峠越え 148
- 40 松本の冬景色 152
- 41 アルプス山麓の美術館 155
- 42 田沢温泉の百年 159
- 43 アンズ咲く山里・善光寺平 163
- 44 志賀高原の奥・大沼池 166
- 45 村上・城下町の味覚 169
- 46 佐渡の外海をゆく 172
- 47 越後獅子のふるさと 175
- 48 能登・冬の味覚 178
- 49 金沢の町はずれ 182
- 50 若狭五湖の早春 185

●近畿地方

51 詩仙堂・風雅の余韻 190

52 嵐山新緑 193

53 底冷えの京の冬 197

54 夏の賀茂川べり 200

55 石垣の町・坂本にて 203

56 近江の古寺 207

57 梅の里・月ヶ瀬 211

58 佐保路・仏の微笑 215

59 淡路の秘境・由良の港 218

60 十津川べり・湯泉地 222

61 現代熊野詣の一夜 226

62 北山峡への愛惜 230

63 牡丹咲く長谷寺 234

64 城崎の湯治場情緒 238

65 アメリカ村の人生 241

66 源氏の落人住む沖ノ島 244

67 海女のふるさと・和具 248

●中国地方

68 夏の吉備路 254

69 小京都・竹原の町並 258

70 川霧の湧く三次盆地 262

71 初夏の東郷湖 266

72 大山の山肌 269

73 消えゆく秘湯・小屋原 272

74 島根半島の外海 276

75 隠岐の島の魅力 279

76 青海島の秘めるもの 283

●四国地方

77 小豆島をめぐる 288

78 出羽島・室戸の風 291

79 落人部落・祖谷溪 294

80 今治の町の前奏曲 297

81 面河溪までの車窓 300

82 大野ヶ原・雲上の草原 303

83 横浪三里の秋 306

●九州・沖縄地方

84 秋月・城下町の一夜 312

85 島原の町・表と裏 315

86 由布岳を仰ぐあたり 318

87 五島列島の西の果て 321

88 九重山麓の野焼き 325

89 心やすらぐ矢岳高原 329

90 阿久根に舞う鶴の群 332

91 宮崎の理想と現実 335

92 神秘の谷間・米良荘 338

93 天草での祈り 342

94 冬の霧島・若人の湖 345

95 桜島・その美景の裏面 349

96 歴史を秘める坊津の港 353

97 九州南端・鰻池 356

98 屋久島の雨 359

99 沖縄の岬にて 363

100 日本のアマゾン・西表島 366

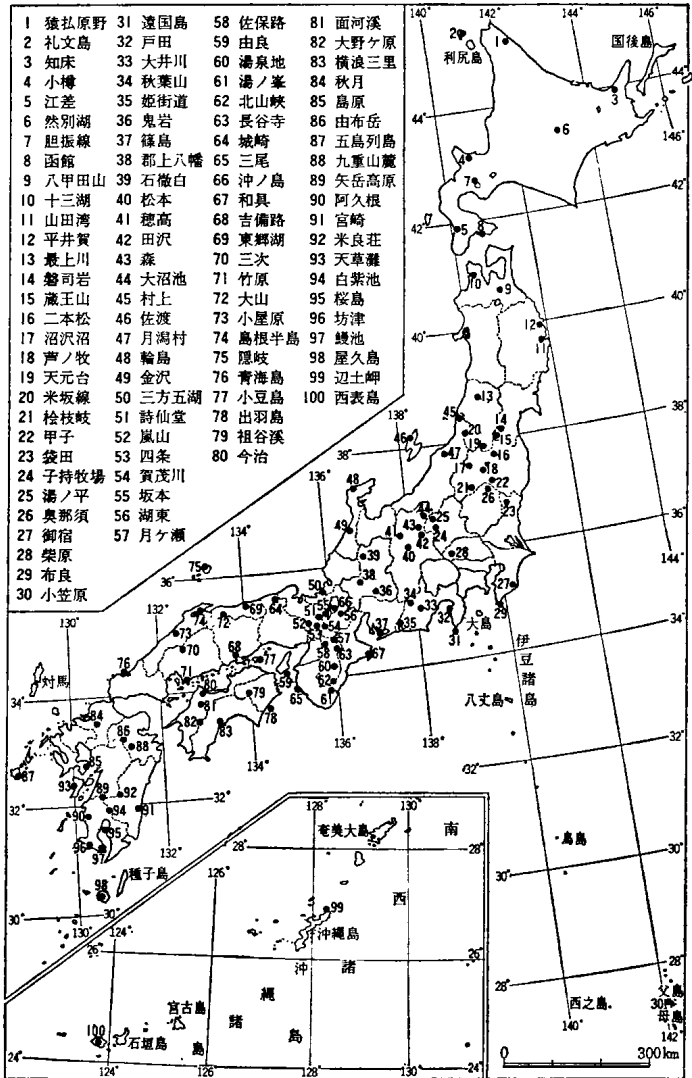
あとがき 370

文庫本のためのあとがき 373



旅情百景

- |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|
| 1 猿払原野  | 31 遠国島  | 58 佐保路  | 81 面河溪  |
| 2 礼文島   | 32 戸田   | 59 由良   | 82 大野ヶ原 |
| 3 知床    | 33 大井川  | 60 湯泉地  | 83 横浪三里 |
| 4 小樽    | 34 秋葉山  | 61 湯ノ峯  | 84 秋月   |
| 5 江差    | 35 姫街道  | 62 北山峡  | 85 島原   |
| 6 然別湖   | 36 鬼岩   | 63 長谷寺  | 86 由布岳  |
| 7 胆振線   | 37 篠島   | 64 城崎   | 87 五島列島 |
| 8 函館    | 38 郡上八幡 | 65 三尾   | 88 九重山麓 |
| 9 八甲田山  | 39 石徹白  | 66 沖ノ島  | 89 矢岳高原 |
| 10 十三湖  | 40 松本   | 67 和具   | 90 阿久根  |
| 11 山田湾  | 41 穂高   | 68 吉備路  | 91 宮崎   |
| 12 平井賀  | 42 田沢   | 69 東輝湖  | 92 米良荘  |
| 13 最上川  | 43 森    | 70 三次   | 93 天草灘  |
| 14 磐司岩  | 44 大沼池  | 71 竹原   | 94 白紫池  |
| 15 蔵王山  | 45 村上   | 72 大山   | 95 桜島   |
| 16 二本松  | 46 佐渡   | 73 小屋原  | 96 坊津   |
| 17 沼沢沼  | 47 月潟村  | 74 島根半島 | 97 鯉池   |
| 18 芦ノ牧  | 48 輪島   | 75 隠岐   | 98 屋久島  |
| 19 天元台  | 49 金沢   | 76 青海島  | 99 辺土岬  |
| 20 米坂線  | 50 三方五湖 | 77 小豆島  | 100 西表島 |
| 21 桧枝岐  | 51 詩仙堂  | 78 出羽溪  |         |
| 22 甲子   | 52 嵐山   | 79 祖谷溪  |         |
| 23 袋田   | 53 四糸   | 80 今治   |         |
| 24 子持牧場 | 54 賀茂川  |         |         |
| 25 湯ノ平  | 55 坂本   |         |         |
| 26 奥那須  | 56 湖東   |         |         |
| 27 御宿   | 57 月ヶ瀬  |         |         |
| 28 柴原   |         |         |         |
| 29 布良   |         |         |         |
| 30 小笠原  |         |         |         |



# 北海道地方

## 1 猿払原野の遅い春

猿払原野——この地名をはじめて目にした人は、一体、どのあたりを想像するだろう。猿が追い払われた原野ならば、かつては、猿が棲んでいたのか、と東北地方の一隅を連想した人がいた。

しかし、そこは、サルフツと発音し、北海道も北端にちかい湿原地帯であった。

「猿が棲む日本の北限は、東北の下北半島です」

と教えたとき、その人は、あらためて、それならサルフツとはアイヌ語でしょう。何のことでしょか、とたずねた。私はそのとき、過目見たこの原野の風景をあらためて思い出して見た。

そこは、オホーツク海に面して、緯度も北ならば、太陽光線のちからも弱そうな原野のひろがりであった。猿払と漢字で書く駅に降りたが、人影はなかった。下車したのは、私のほか二、三人、駅をとりまく大地は、湿原そのものだった。

地図でみると、この駅からオホーツク海までは歩いてもわずか三十分の近さと思われたので、わざわざ降りてみたのだが、汀へ通じる道は、湿原を迂回していた。オホーツク海と駅との間には、さっき車窓から湖面が見えた大きな沼があった。

オホーツクの海岸まで行ってみても、そこから南へ、海辺にそう道はなさそうなので、天北線のレ-

ルにそつて歩くことにした。

「猿払原野は、ここから三つ先の浜頓別駅までの間です」

と駅員が言った。それなら、と浜頓別の方向を指して歩くことにした。

「サルとは何のことでしょう」

とたずねた私に、駅員は、

「湿原のことですよ」

と答えた。それなら、うなずける。猿がいるはずはない。猿は熊とちがつて北海道にはいない。いない動物の名を「宛字」したのは誤解を招く、と私は笑った。しかし、そういう地名の由来を聞いてしまふと、逆に、この不遇な原野が、私には慕わしいものとなった。

歩こう。一時間ちょっとで次の駅に着けそうだ。

「蒸気機関車が走っていたころは、若い人がよくこの先で、SLの写真を撮っていたよ」

とその後のさびしさを嘆いた駅員は、遠来の客に親切さを示してくれた。

カムイト沼。そこもレールのかたわらに湛えられた小さな沼だった。カムイ——とは「神」、トとは「湖」のことだ。いま見ても、まだ十分に神秘的だ。猿払駅前のポロ湖も湖畔に近寄れなかったが、この湖の対岸は一日歩いても人家はなさそうだ。

私は、地名に惹かれて、ふらりと猿払駅に降り立ってしまったが、さっきの駅員はこれより少し北の海辺に、ロマンティックなところがあるといった。

そこは村営の牧場で、千頭も牛が放牧されていて、展望台に登ると、カラフトが見える、と言った。

今日の天気ではどうだろう。おそらく、沖よりも、足もとの花に目がむくだろう。ここでも花が咲きはじめている。北海道ではここにかぎらず、さいはての海辺が人を寄せている昨今だ。

肌寒いが、この今歩く道の左右にも、北国の春は来ている。もう少し経つと、ハマナスやスズランが海辺をいろどるだろう。湿原のまわりでは、花よりも、葦の葉の色が季節を示している。

途中でクルマに便乗した。それは救いだつた。浜頓別まで歩いてゆくと半日はかかりそうだ。やがて、天北線のレールにそう道はゆるやかに登りとなり、行く手に、大きな湖を見せはじめた。

「クッチャロ湖です」

とクルマの主が教えてくれた。「クッチャロ湖」といえば、有名な阿寒の一角の湖と同名だ。

「クッチャロというのは、沼の水が出る川の喉のことですよ」

この沼のクッチャロは浜頓別の駅にちかいところで先住民族の遺跡があるそうだ。

「あれが鳥類観測センター」

と首を右へ曲げて湖の方をみる運転者の視線を追えば、鳥の姿はなく、人っ気ない湖畔がまだずっとつづいているようであつた。

「白鳥が数千羽も来ます」

思わず、空を見上げた。ここはシベリアから渡ってくる彼等にとつて、もっとも手近かな着陸地だろう。

「ここで白鳥たちは一度休んでから、本州へ渡るんですよ」

帰るときも、四月にはまた集まるそうだ。

浜頓別の駅の手前でクルマを降りた私は、沼のほとりを歩いた。

駅にちかづいたと思ったとき、「白鳥の碑」というのがあった。沼はあまり美しくはなかったが、茫洋としているのがよかった。展望のよさそうなレストランで休んだ。冬はこの湖上で帆掛けスキーがたのしめるという。

北国の冬の風を利用して滑るとすれば、この湖ならではのものだろう。

湖面が全面凍りつく真冬を思いうかべてみた。浜頓別の駅前は当世風だったが、乗った列車は、ふたたび、人煙まねな風景を見せはじめた。旭川までの時間は長かった。

## 2 国境の島・礼文島

利尻島ゆきの汽船は、稚内を午前八時に出る。突然、その島へ行く気になった私は、稚内でもう一夜明かすことを余儀なくされた。

二時間ほどと聞いた航路だったが、やがて日本海は波立ちはじめ、船客の大半が船底に横たわりはじめた。私はデッキに立ち、見えはじめた利尻富士の美しさに酔うことによって、船酔いを忘れようと努力した。

美しく巨大で、富士山よりも荒けずりな火山だ。円錐火山それ自体が海に浮かんでいるのだ。上から見れば、ほぼ円形をし、東西四里、十六キロ、といえば、伊豆の大島などより、はるかに大きい。地図でみると、大島と形もそっくりで、やがて着く鰐泊の港は、大島の岡田港の位置にあたる。ただ、同じ火山島でも大島では絶対味わえない冷やかな大気と、海の色。

日本の北の果てだ。大島には、こんな国境の風景や、利尻富士のもつ万年雪はない。

最北端にうかぶ、礼文島が右手前方で、平板な地形を見せはじめたとき、利尻島の立体美はさらに美しさを増した。

「利尻富士を見るなら、礼文島の方がいいんですよ」



と私の傍らで船員が言った。そう聞くと、礼文島にも行きたくなかった。利尻島を一周して、私は翌日礼文島に渡った。礼文島の方が北なので、旅情は国境を意識させた。

礼文島と言えば、利尻島とは対照的な地表が魅力だ。巨大な女体を連想させる半円形の丘が桃岩とよばれていて、登りたくなる。夏なら海辺から一時間登った山肌で、日本アルプス顔負けの高山植物が咲く。レブンウスキソウである。

しかし、いまはまだ初夏。北緯四十五度の気温は二、三日前の東京とは一季節も逆もどりしたかんじの冷やかさだ。晴れた日ならカラフトが見える。日本の最北端は宗谷岬だが、礼文島はさい果ての島だけに、この先の水平線が気になる。

泊ったのは、一軒の民宿。私の旅はいつも庶民の声が直接聞けるような環境をえらんで泊る。果たしてその民宿は町はずれだっただけに、主人は純粹な漁師であった。彼は私が北の水平線に興味を示すと興奮した面持で海図をひろげた。その海図は彼の愛用の日用品のように手垢でよごれていたが、片時もなくてはならぬ宝物のようにも見えた。

ソ連船に漁船が拿捕されるという事実について、彼はひとしきりその実状を語った。

「三時間ほど沖へ出ると、国境でね、秋から冬にかけてよくつかまるんですよ。なぜ危険を冒しても行くかというと、カラフトとの間に、カイバ島という島があるんですよ。あそこまで行くと一週間で一月分の水揚げがあるんですね」

そのカイバ島は幻の島である。日本の地図には出ていない。しかし、たしかに、国境を越えた地点にある絶好の漁場のようである。しかしそこには、期間を決めて、ソ連の監視船が見張っている。